



淡海の密教法具

滋賀県立近代美術館

学芸課長 榮樂 徹

〈淡海〉は、京の都に近い淡水の海（琵琶湖）のある地、を意味し、〈近つ淡海〉から〈近江〉と略され、古くは〈志賀〉、新しくは〈滋賀〉と同義です。京の都から距離的に遠い淡水湖（浜名湖）のある地、の意味の〈遠つ淡海〉ちぢめて〈遠江〉と対比されます。

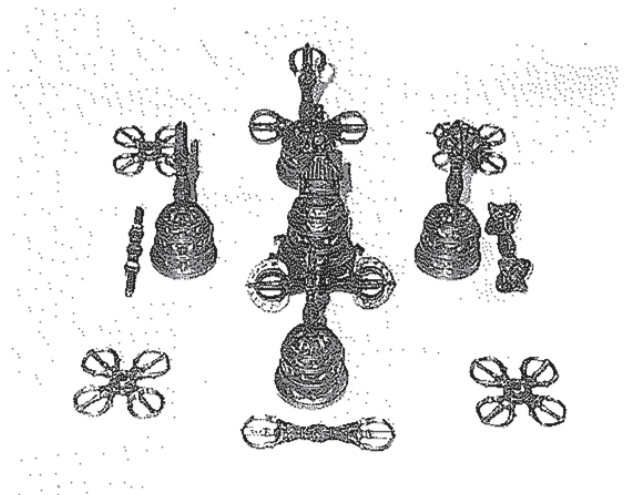
〈密教〉は、仏教の流派の一つです。真言秘密の教えとも、身口意三密の法門とも呼ばれます。大日如来が説いた、奥の深い簡単に知ることのできない教えです。大日如来は、宇宙を照らす太陽で、宇宙に存在するすべてのものの大もととされる仏、大宇宙の理知の本体です。理知（ものごとを冷静に判断し思考する能力）のうちの理の部分（金剛界、知の部分）を胎蔵界と呼んでいます。身口意は、身（体）の一部の指先で印（色々なかたち）を作り、口で真言（梵語）の呪文（まじないの言葉）を声に出して読み、意（心）を落ち着かせ、純粋でない不正な考えを追い払うこと。加持祈禱を、そのために大切にし、日本においては、平安時代以降に広く信仰されました。7～8世紀ころに、インドで生まれ、中国を経て、日本に伝わってきた密教は、台密と東密の二つがあります。台密は、最澄（767～822）が始めた天台宗延暦寺の密教、東密は、空海（774～835）が開いた真言宗東寺の密教です。いずれも、現在まで伝わっています。

密教に対する宗教を顕教といいます。教えが、秘密ではなく、文字で明らかに説かれた仏教です。華嚴宗、禪宗、浄土宗などの各宗を指します。顕宗、顕法とも呼ぶようです。

〈密教法具〉は、したがって、密教の加持

祈禱を行う時の修法に用いる道具を一つにまとめて呼ぶ言葉です。〈すほう〉〈ずほう〉とも言う修法は、壇を設け、本尊（大日如来）を招いて、真言を唱え、印を手に結び、心に本尊を親じて、息災（健康）／増益（裕福）／調伏（敵や悪魔の退治）／敬愛（うやまい愛すること）などの祈りを行うことです。壇には、①大壇、②密壇、③護摩壇の三つがあります。これらの壇の上に置かれる道具が、〈密教法具〉です。〈密教法具〉は、以下のとおり、それぞれ適当な位置に置かれます。

①大壇は、まず、壇の四隅に櫛を立て、四つの櫛を縄でつないで結界（境界）を築きます。櫛の内側に花瓶、壇の中央に五つの色の蓮の花を活けた瓶（五瓶）を置き、この花瓶の間に四面器（火舎／六器／飯食器／供物）を並べます。四面器の内側の四隅に盤に載せた羯磨と輪宝を据えるのが普通です。台密では、しかし、四隅の内側の中央に五鈷杵／五



「白銅行事壇具」 江戸時代／弘法寺（大津市）

これい ほうこしよ ほうこれい とつこしよ とつこれい さん
 鈷鈴、宝鈷鈴／宝鈷鈴、独鈷杵／独鈷鈴、三
 こしよ さんこれい
 鈷杵／三鈷鈴の一组を、壇の一番中央には塔
 しよ とうれい
 杵／塔鈴を置きます。なお、壇の四隅のかど
 に、とうだい 手前にれいばん 左にわきつくえ
 柄香炉、灑水器、塗香器が置かれることもあ
 るようです。台密と東密では、配列や用い方
 に違いがあります。密教は、秘密の宗教だか
 ら、密教法具にも秘密が多いようです。

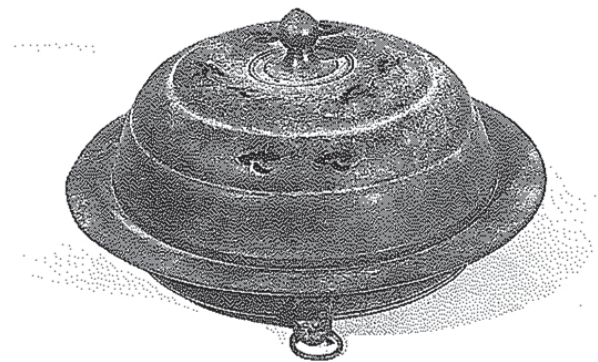
②密壇は、最初に、壇の両脇にとうだい 前列
 の中央に火舎、火舎の左右に三つずつの六器、
 六器の左右の端に飯食器を連ねてならべます。
 六器は、左右のいつい あか
 一对を闕伽／塗香／華鬘と呼
 んでいるようです。実際は、少ない水か活花
 かきみ
 か密の葉を決まった数だけ飾ります。これら
 の前の方のうしろの中央に五鈷杵と五鈷鈴を
 のせた盤、その左と右にまんなかからそれぞ
 れ汁／餅／菓子こなを供えるのが原則です。台密
 では、うしろと前のならべかたが逆で、うし
 ろに花瓶一对を置きます。

③護摩壇は、壇のまんなかろに炉をおいて、
 炉のまわりに大壇と同じような法具を用いま
 す。しかし、法具は、修法の種類によりちが
 うようです。秘密の宗教だからでしょう。

密教の修法（加持祈禱）に使われる〈密教
 法具〉は、単なる置物おきものではありません。実際
 の役にたつ道具なのです。人間の煩悩ぼんのう（良か
 らぬ思おもい）を払うためのもの、眠っている人
 間の仏性ぶつしょう（人間みんなが仏になれる性質）を
 めざめさすもの、護摩道具、供養具の四つに
 大きくわけることができます。

人間の煩悩を打ちくだくのが杵、羯磨、輪
 宝で、杵は独鈷杵、三鈷杵、五鈷杵のように
 金棒の、両はしのとがったき刺し殺す道具です。
 二つの三鈷杵を十文字じゅうもんじに組みあわせた羯磨、
 四つの独鈷杵を輪のように組みあわせた輪宝
 も、集まっている多くの人々に投げ入れて殺
 す道具なのです。

人間の仏性をよびさすのが鈴。鈴には、
 杵と同じように独鈷鈴、三鈷鈴、五鈷鈴など
 があります。もともと眼科の医者いしやの道具であ



「金銅火舎」 平安時代／常楽寺（石部町）

った金錐こんべいは、これで人間の心眼しんがん（物事の大事
 なところをはっきり見分ける鋭い心の働き）
 を開かしめるためのものです。

護摩は、「焼」を意味します。俗塵ぞくじん（人間の
 心のよごれ）を焼きほろぼして、身体を清ら
 かにするために用いるものを護摩道具とい
 います。護摩炉、護摩杓しやくなどです。

供養具は、密教の修法を完全にするため道
 場を清め飾り、いろいろな神さまやもろもろ
 の仏さまを供養する道具です。供養具には、
 香こうをたいて供養する火舎かしゃのほか六器、花瓶、
 飯食器、灑水器、塗香器などがあります。灑
 水器和塗香器をあわせ二器ともいうようです。

なお、〈密教法具〉のすべては、金属を材料
 として細工された金属工芸品（金工品）であ
 ることが、特色です。

〈淡海〉の〈密教法具〉は、天台密教の発
 展と足どりが、そろっています。近江出身の
 寂澄さんかくしんこうが始めた天台密教は、特に山岳信仰（山
 や岳おかを神としてあがめること）と結びついて、
 淡海各地の山々には伽藍がらん（寺）や塔頭たつちゆう（わきで
 ら）が建てられ、それぞれが強力な文化の発
 信地という役わりを果たしていました。比叡
 山を中心とする延暦寺えんりゃくじ、西教寺さいきょうじ、聖衆来迎寺しゅうじゅうらいごうじ、
 園城寺おんじょうじ。湖南の金勝山を中心とする金勝寺、
 金胎寺こんたいじ、常楽寺じょうらくじ、長寿寺ちやうじゆじ、善水寺ぜんすいじ。天台の湖
 東三山と呼ばれる百濟寺ひやくさいじ、金剛輪寺こんごうりんじ、西明寺さいみょうじ。
 湖北の己高山こだかみやま七箇大寺。以上などです。

したがって、これらの天台各寺で使われた

密教法具の数は、多かったにちがいありません。しかし、戦国時代の織田信長による天台寺院の焼打ちはその数をとてたくさん減らしてしまいました。天台密教の王国である淡海に密教法具が量も質も豊に残っていないのは、なんとしてもさみしいかぎりです。しかしながら、現在まで伝わる密教法具が近江に全くないわけではありません。今までに残る〈淡海〉のおもな〈密教法具〉の所有者と作られた時代を挙げると以下のとおりです。

大津市 延暦寺

- 金銅独鈷杵 平安時代
- 銅割五鈷杵 鎌倉時代
- 金銅都五鈷杵 鎌倉時代
- 金銅五鈷鈴 南北朝時代

大津市 聖衆来迎寺

- 金銅独鈷杵 平安時代

大津市 双巖院

- 金銅五鈷杵 鎌倉時代

大津市 弘法寺

- 金銅五鈷杵 平安時代
- 金銅五鈷鈴 鎌倉時代
- 金銅八角輪宝 鎌倉時代
- 金銅金錚 鎌倉時代
- 白銅行事壇具 江戸時代



「金銅飯食器」 平安時代／常楽寺（石部町）

- 杵（独鈷／三鈷／五鈷／宝／塔）
- 鈴（独鈷／三鈷／五鈷／宝／塔）
- 羯磨

大津市 無動寺

- 金銅密教法具 江戸時代（弘化三年）
- 杵（独鈷／三鈷／五鈷／宝）
- 鈴（独鈷／三鈷／五鈷／宝／塔）
- 輪宝
- 羯磨
- 火舎
- 六器
- 飯食器
- 花瓶

大津市 正法寺

- 金銅金剛盤 鎌倉時代

大津市 園城寺

- 金銅五鈷杵 鎌倉時代
- 金銅羯磨 鎌倉時代
- 金銅仏供盤 鎌倉時代
- 白銅五鈷鈴 室町時代
- 白銅金剛盤 室町時代

浅井町 醍醐寺

- 法具類 室町時代
- 五鈷杵
- 輪宝
- 羯磨
- 羯磨台
- 四椀

木之本町 鷄足寺

- 金銅金剛盤 鎌倉時代

甲良町 西明寺

- 密教法具 鎌倉時代
- 杵（独鈷／三鈷／宝珠）
- 鈴（独鈷／宝／塔）

火舎
六器
六器台
羯磨

栗東町 金勝寺

銅独鈷杵 鎌倉時代
銅五鈷杵 鎌倉時代

石部町 常楽寺

金銅火舎 平安時代
金銅飯食器 平安時代

甲賀町 岩室区

金銅五鈷杵 南北朝時代
金銅五鈷杵 室町時代
金銅羯磨 鎌倉時代

延暦寺の銅割五鈷杵は、人形杵とも呼ばれる変わったものです。ふつうの五鈷杵を縦に割って、両はしの鈷（きっさき）を三つと二つにして交互に組み合わせています。延暦寺の金剛都五鈷杵も、また、ふつうのものではありません。両はしの鈷を極端にすぼめて独鈷杵のような形に作っています。全体が細く、おそらく特別な秘密の修法に使ったようです。

聖衆来迎寺の金銅独鈷杵は、元三大師（天台宗の僧の良源）が横川般若坂の陽勝仙人よりいただいて、村上天皇（926～967）の皇后の安産を祈るために用いたと伝えます。

弘法寺の金銅五鈷杵は、両はしの鈷が、ふつうの五鈷杵よりもすぼんでいます。しかし、都五鈷杵ほどすぼんではいません。真中に孔があいています。舍利（仏を火葬した骨）をうめこんでいたのかもしれませんが。弘法寺の白銅行事壇具は、江戸時代に作られたものですが、とてもきめこまかで美しくはなやかです。白銅は、錫を多くふくんだ銅で、かたくて白い色をしています。五鈷杵などに刻まれた文字から貞享四年（1687）に作られたよう

です。行事壇具は、定期の修法に使われる道具と考えたらいいでしょうか。

比叡山の東塔無動寺の金銅密教法具も江戸時代（弘化三年／1846）に作られたものです。しかし、形は慈覚大師（円仁／794～864）が中国から持ち帰ったものに似た古式です。

園城寺の白銅五鈷鈴と白銅金剛盤は、いっしょに使われたようです。盤の上に残った丸い跡が、五鈷鈴の丸さと良く合います。盤に永禄元年（1558）と刻まれ、制作の時期がわかる貴重な〈密教法具〉といえます。

醍醐寺の法具類は、いっしょに伝わる説相篋の裏に墨で文亀三年（1503）と書かれていますから、たぶん、このころに作られたものでしょう。これらは、同寺が注文したのも他所から集めたものも含んでいるようです。

西明寺の密教法具は、ひとまとめにして唐櫃に納められています。唐櫃のふたの表に西明寺灌頂仏具、側面に観応元年庚寅十月八日とV字形に彫った文字があります。灌頂は密教の儀式のことです。観応元年は1350年ですから、これらの法具は、この年よりも前に作られたと考えていいでしょう。

常楽寺の金銅火舎は、直径が31cmの大きなものですが、高さは約17cmと低いです。ふたには古い形式の飛雲文の透しがあります。常楽寺の金銅飯食器も、大形ですが、高さは低いものです。火舎、飯食器ともに、平安時代後期に作られた〈淡海〉を代表する〈密教法具〉といえます。

滋賀文化財教室シリーズ No.146号

発行年月日 1994年11月30日
編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
〒520-21 大津市瀬田南大萱町1732-2
TEL(0775)48-9780 FAX(0775)43-1525